

論文の要旨

本論文は、中国人および日本人 EFL (English as a Foreign Language) 学習者が英語で謝罪行動を行う際に用いる語用論的ストラテジーを英語母語話者と比較し、中国と日本の英語の教科書における謝罪表現の扱いを分析することで、第二言語としての英語における謝罪の語用論的習得過程を多面的に明らかにすることを目的とするものである。謝罪は対人関係の維持・修復に深く関わる言語行為であり、文化的規範、社会的距離、場面の深刻度などの社会語用論的要因が強く影響する。本論文では、EFL 学習者がどのようにこれらの要因を処理し、どの程度英語母語話者に近いストラテジー選択を行うか、またその習得を支える教材にどのような課題が存在するかを検討したものである。

第 1 章 Introduction (はじめに) では謝罪行動が異文化間コミュニケーションで誤解を生みやすい領域である点を背景として、中国人・日本人 EFL 学習者の英語謝罪が母語文化の影響を受けて偏りを示すことを確認する。先行研究には、両学習者を同一枠組みで英語母語話者と比較する研究、ならびに学習者の実態と教科書記述を結びつける研究が不足しているという課題がある。本研究はこの不足を補い、理論面と教育面の双方に資する知見を提示することを目的とする。

設定するリサーチクエスションは次の 5 つである。RQ1: 中国人 EFL 学習者、日本人 EFL 学習者および英語母語話者は、異なる社会的文脈において、どのような謝罪ストラテジーを用いるのか。RQ2: 中国人 EFL 学習者と日本人 EFL 学習者の謝罪ストラテジー使用には、どのような相違点および共通点が見られるのか。RQ3: 中国人・日本人 EFL 学習者の謝罪ストラテジーは、英語母語話者と比較して、どの点において最も顕著な乖離を示すのか。RQ4: 中国および日本の英語教科書において、謝罪はどのように提示されているのか。また、それらの教材は実際の謝罪行為の語用的複雑性を十分に反映していると言えるのか。RQ5: 本研究の結果は、第二言語教育、とりわけ語用論能力の指導に対して、どのような示唆を与えるのか。

第 2 章 Literature Review (先行研究紹介) では謝罪研究・語用論研究の主要枠組みを整理する。Speech Act Theory により謝罪の位置づけと文化差の影響を確認し、Grice の Cooperative Principle が謝罪においてどのように関わるかを検討する。さらに Politeness Theory として Lakoff、Leech、Gu Yueguo、Usami Mayumi 等を取り上げ、文化的規範の違いが謝罪ストラテジーに反映される仕組みを示す。あわせて Cross-Cultural/Intercultural/Interlanguage Pragmatics の研究動向を概観し、中日 EFL 学習者の謝罪研究の到達点と課題を明確化する。

第 3 章 Methodology では方法論を説明する。本研究は Study 1 (学習者データ) と Study 2 (教科書分析) の二部構成とする。Study 1 では、8 場面の DCT (談話完成課題) を用いて中国人 170 名、日本人 50 名、英語母語話者 25 名からデータを収集し、謝罪相手 (教師・学生・友人・知らぬ人) との権力関係、社会的距離、過失の重大度 (軽度・重度) を操作し

て、文脈に応じたストラテジー選択と組み合わせを検証する。分析には CCSARP（異文化間発話行為実現プロジェクト）と Leech（2014）を採用し、直接謝罪に加えて理由説明・責任認知・補償・再発防止の約束などの間接ストラテジーを体系的に分類する。Study 2 では、中国・日本の中学・高校教科書を対象に、謝罪表現の頻度・構造・提示形式・社会語用論的特徴を内容分析し、学習者データとの整合性を検討する。

第 4 章 Analysis and Findings of Study 1（Study 1 の分析と結果）では中国・日本の EFL 学習者と英語母語話者の謝罪ストラテジーを比較した結果、学習者は直接謝罪の反復に依存しやすく、母語話者の多層的で柔軟な組み合わせ使用とは異なる傾向が示された。母語話者は重度の過失場面で責任認知・補償・再発防止を組み合わせ、関係修復を重視する応答を行う。一方、中国人学習者は理由説明、日本人学習者は曖昧化・婉曲表現を多用し、それぞれの母語文化のポライトネス規範に由来する語用論的転移が示唆された。また、程度副詞の過剰使用や不適切な依頼表現など、英語の社会語用規範理解の不足も観察された。さらに、社会的距離・対人関係・深刻度に応じた調整が十分でない点が明らかになった。

第 5 章 Analysis and Findings of Study 2（Study 2 の分析と結果）では中国と日本の中学・高校英語教科書を分析すると、謝罪場面の提示頻度は限定的で、扱われる表現も固定化されていることが確認された。社会的距離、過失の重大度、対人関係といった要因に応じたストラテジー選択を指導する記述はほとんど見られず、語用論的判断力を育てる機会が不足している。学習者データとの比較から、教科書の偏りが学習者の謝罪表現の硬直性や形式依存を助長している可能性が示された。

第 6 章 Discussion（議論）では Study 1 と Study 2 の結果を統合し、謝罪行動の語用論的・社会語用論的特徴を総合的に検討する。語用言語的分析では、直接謝罪と支援ストラテジーの使用、定型性と柔軟性の差から、中国・日本の EFL 学習者の表現多様性の不足を論じる。社会言語学的分析では、過失の重大度、社会的役割、社会的距離が選択に与える影響を整理し、学習者が文脈調整を十分に行えない傾向を指摘する。教育学的考察では、教科書記述と学習者の実態を踏まえ、ポライトネスや文化的背景を含む語用論指導の強化が必要だと結論づける。

第 7 章 Conclusion（結論）では、リサーチクエスション 1～5 への答えを示した。RQ1 については、中日の学習者ともに母語話者と同じの主要ストラテジーを用いるが、ストラテジーの使用頻度に差があること、RQ2 については共通点として明示的謝罪を完全に習得していること、相違点として中国の学習者は説明によって謝罪を補完する一方日本の学習者は説明を控えることで誠意を示すこと、修復・保証について中国の学習者は積極的補償を約束するが、日本の学習者は補償に言及するが抑制的であることが示された。RQ3、RQ4 についても詳細が示された上で、RQ5 については文脈適応能力の明示的指導の必要性、文化間語用論的意識の育成の必要性、教材の質的改善と真正性の補完の必要性が指摘された。